ヒロシマの印象

被爆者と政治的状況の対話

―今浦編集員―

アンチクライマクスな始まり

八月五日午前八時広島駅。立ち並ぶ××県原水禁の旗。行き交う先導者らしい人々。他方では電車を、バスを待ち、職場に急ぐ市民。年に一度の原水禁大会と三百六十五日のアンチ・クライマックスな生活。日常性と非日常性の交錯。しかしこの二者の間には違和感は存在しない。奇妙にしっくりと融け合っているのである。ヒロシマ。

空は雲もなかった。ラジオの予報は台風の接近を告げていたのに……。しかし一睡も出来なかった夜行列車の疲れが重くのしかかり、僕はこの一見無秩序な、だが求心運動的な二つの流れを、ほとんどうるさいものに感じていたのだった。

五日午後五時。平和公園、日本原水協（日共系）の大会々場は本川小学校に変更された模様である。原水禁国民会議（社党、総評系）と原水協の二つの大会が、同じ日の同時刻に県立体育館の使用を予定していたため、処置に困った関係者は両方を断ったのである。国民会議の方は大会総会を明日に延長し、五日は中島小学校でベトナム戦争反対の抗議集会を開くことにしていた。

それにしても僕はゆううつであった。五日は原水協の大会に行くつもりであった、会場の入場を許されそうにもなかったからである。国民会議の方は、東京教育大の人たちの計いで全国大学新聞の共同デスクが組まれるはずである。しかし原水協の大会には、そんな便宜はない。所属県の県水協代表としてしか入場できないと聞いていた。だが一般商業新聞の記者はどうだろう。入場を許されているはずだ。とにかく行ってみることにした。

本川小学校は太田川の支流本川を隔てて、平和公園の西二百㍍ほどの所にある。大橋を渡れば、すぐそこである。橋は市内各所から行進してきた人々で埋っていた。大群集をすり抜けて小学校に近づくにつれて、日共系独特のムードが濃くなるのを感ずる。誹謗ではない。しかし妙に和気あいあいとした、だが排他的な、一種清教徒じみた雰囲気！

〈全学連加盟校の代表は必ず警備本部に集合〉―まさか腕力だけを買われたのではあるまいが。

よく冷えたジュースが「団結ジュース」（あとで会場に入れてもらった時、団結むすびも売られているのをチラと見た。あるいは記憶の誤りで反戦むすびであったかもしれない）

本川小学校前には大日本愛国党の赤尾敏も来ていた。人々は遠まきにして彼の名をささやき交している彼も有名になったものである。

宣伝カーの上に、鉄カブトに身を固めた数人の若者を従え、マイクでわめきちらし、若者達に「中ソの手先原水禁等の欺瞞と謀略を暴露する」という勇ましいビラを撒き散らさせて「お前らよく読んでみろ、よく読むんだ」と絶叫し、軍艦マーチに耳を傾け、時折疲れたような顔に今日のデモストレーションの効果を確めるような微笑をうかべるのだった。しかし彼等はまもなく県警の機動隊に強制退去させられてしまうのだ。結局彼等は大会の演出を不本意にも助けてしまったのではないか。

予期はしていたが、やはり入場は断わられた。何故か？よく解らないが、身元不明の人物を勝手に入場させるのはまずいことだからだろう。二年前の全学連の学生の行動を考えただけでも、その処置は当然なのだろう。しかし僕は強引に粘った。学新のための記者席はないものかと、警備の人といっしょに会場内を捜したが、あろうはずもなく、やはり入場をあきらめなければならなかった。

そうなれば仕方なく比較的低い垣根の外から大会を見物する他はない。そこからは約七十万円かけて作ったという大ステージの上の、にこやかな外国代表団がやけに眼につくばかりである。拍手。拍手。拍手。

対岸の供養塔では種々の宗教団体が絶え間なく念仏を唱え続けているはずだ。

外国代表の一人が英語で語り、美しい女性の声が通訳する、「核兵器はそれ自体脅威ではありません。平和の敵によって使用されることが脅威なのです。」という演説を聞き、マル同の人のくれたビラの文句―（一）運動を非政治のワクに押し止める（二）世界の平和勢力を守ることが運動の目的であるとする、という原水禁運動を誤らせる二つの偏向の指摘を思い出し、ベトナム問題に絞ってゆく大会を想い、両岸とは無関係な本川のボート小屋のプロ野球放送ををも想い、政治―生活―宗教という図式を組み立て、頭の中でぐるぐると回してみて少しばかり気に入り、いかん、感傷はいかんとつぶやいて、それを旅の疲れのせいにするのだった。そして僕同様入場できなかったヒロシマの市民たちといっしょに垣の外から「原爆許すまじ」を歌って宿に向った。

八月六日

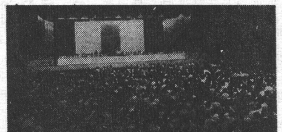
翌六日は原爆記念日。八時より平和公園で市主催の平和祈念式典が行われた。時刻しかし、ここでは、浜井市長が道ゆく自動車にも停止を呼びかけた全市をつつむ静寂の一分間を、遺族代表の若者が打ち鳴す平和の鐘を響さを、そして非人間的受難の地広島から育った少年達の歌う清らかで、感動的な「平和の歌」の合唱を書くに止めよう。

また午後二時県立体育会館で開催された、国民会議系の開会総会の模様も、森滝市郎氏のいかにも老学究らしい演説を上げるに止めよう。残りの枚数を主に被爆者を囲む懇談会について書いてみたいと思う。

僕が参加した懇談会は国民会議主催のそれで、六つに分かれた会場には、それぞれに被爆者と顧問の代議士と大会に参加した地方代表の間で懇談会が構成されていた。僕は懇談会こそ原水禁運動の進め行く上で、忘れられてはならないものであると思っていた国民会議に記者として参加した意味も、懇談会に加われることにあった。たしかに懇談会に出席して、自分の体験を語り得る被爆者は、いわゆる意識の高い人に限られていて、それはやむを得ないことだろう。

会場は本川小学校であった。僕がそこに到着した時、すでに一人の老婦人が、談々とした口調で二十年前の悲惨を語っていた。そして語り終ると静かに黙礼し席に帰っていった。事実だけが持つみというものだろう。淡々と語られるだけに、かえってそれは聞くものをとらえるのであった。

次に参加者に配られた資料に沿って、顧問の社会党代議士の問題提起。いま一番問題になっている原爆白書の作製のこと、今年の上半期に原爆症でさらに三十六人死亡したこと、また特別被爆者を爆心地から三㌔以内（以前は二㌔）に拡大し、新たに四万三千人が特別被爆者に加えられたことなどであった。そして最後に質疑応答がなされたのであるがやはり質問は被爆者の運動に於ける位置（または役目）というものに集中していった。北海道代表だという青年の発したおよそ以下のような問いであった。



六日国民会議系の世界大会

政治状況と被爆者

彼の住んでいる田舎町ではじめ二、三の人が中心になって平和投票を提唱し、住民の半数の署名を集め、平和宣言を発表することができた。この体験から、市民による平和への意志表示という新しい運動を全国的に広げることを考え広島に到着してから、先ず被爆者の家庭を訪問しようと、その地区の人たちは市内を歩いた。しかし意外にも被爆者は面会を避ける人が多く、ほとんど署名は集らなかった、というのである。

その問いに司会者が「私が答えられるかもしれない。」といって語り始めた。彼もまた被爆者で、私は始めて知ったのであるが、家族五人が被爆し、上の娘さん二人は学徒動員先で死亡し、五才の娘さんと奥さんは家の下敷になって死亡した。息子さん二人は広島にいず無事であった。被爆者の多くは大体自分のような悲惨な運命に見舞れているから、けっして、アメリカに対して好感情を抱いてはいないと思う。しかし死んだ家族のこととか、自分の傷とかを考えると、今日一日（ひとえ）は静かにしていたい。政治の道具として使って欲しくないと想っているのではないかと答えた。そして質疑応答は続き、以下乱暴に言えば、老司会者も以上のような考えは被爆者の偏見であると譲歩し、代表者たちの一人は自分達にもそのような行過ぎがあるかもしれない、だから相互の信頼、自己批判のうちに運動の高揚を！と述べ圧倒的な拍子で一応幕となったのである。

原水禁運動に於ける被爆者の位置はどのようなものであるべきか。それは難しい問題である。分裂しているにしろ、原水禁運動がこれほどの規模を持ち、組織を持ち、大会を開き続けている以上、政治的になるのは必然であろう。（僕はそれ自体は問題の根源＝政治を繋つ意味で正しいと思う。しかし政治色が濃くなればなるほど被爆者の位置は難しいものになるのではないか。残酷かもしれないが、運動の発火点としての役目が終ったいまは、「政治の道具」でしかないのかもしれない、と思うこともある。そしてこの発想もなにかが狂っているとも思う。明確な答えは出ないかもしれない。が、これだけははっきりいえる。〃悲惨な被爆者〃の存在なくしては原水禁運動は起らなかったはずである、と。それは起爆装置と原爆の関係にも似ているかもしれない。

「見るということは現代写真のもっとも重要なトリックなのです。……人間は外面の三次元を越えて、知っていること、すでに経験していることを、それについて既にある観念をもっていることだけしか見ません。…写真はかくれていた知識を意識の表面に浮かび上らせるために存在するのです」

と、この写真集を企画、構成したカルル・パーベクは（この写真集の方法について）述べる。これを次の三島由起夫の言葉と対照してみよう。

この現実の瞬間の印象が、帰国ののちには夢の中の印象と等質のものとなること、なぜなら記憶はすべて等質だから、夢の中の記憶も現実の記憶と等質のものでしかないこと、その記憶の瞬間において、私の観念はまた何度でもリオを訪れリオに存在するかもしれないが、私の肉体は同時に地上の二点を占めることはできないこと、もはや死者が私の中に住むようにしてリオは私の中に住むにすぎないが、もう一度現実にリオを訪れてもこの最初の瞬間は二度とかえらぬであろうということ、その点では時がわれわれの存在のすべてであって、空間はわれわれの観念の架空の実質というやうなものにすぎないこと、そして地上の秩序は空間の秩序にすぎないこと……（ラテン・アメリカ紀行」）

時の内化の方法を

写真集の可能性

岡本昭彦の「南ベトナム写真集でさえ、われわれに薄膜を通すような日本での現実生活との薄離を苛立たしく感じさせずにはおかなかった。この写真集の企画者も言うように、写真集の示すことができるのは「実在の仮装をはぐのに写真がどのように寄与しているかという、あるいは、人生の美と哀しみについて、写真が私達の意識にどの程度呼びかけられるか、ということぐらいなもの」であり

そして現代の状況の中に隠蔽された現代をあばき出す余地がないわけではない。そのような目的を岡村昭彦の写真集ももっていたことは確かだし、その効果について過少評価することは決して出来ない。しかし、現代の状況―予定的既知状況のコミニュケーション、あたかも無限に知ることが保証されているかのような外膜を持った。そしてその状況を衔う一端は映像文化なのだ。―の中で、それらの写真集がやはりその状況に足をすくわれる形で埋没させられることも確かだ。それは空間的知の次元であり、そこに埋められるべき空隙が未だ存在することは確かだが、それを時間的識とともに内化することは困難にさせられていることも確かなのだ。

音楽はロマン・チストの芸術であり、絵画は論理的な芸術であるという言葉があり、これは音楽を時の芸術として、絵画を空間（それを定着するもの）としてみるような視点を含んでいるのだけれども、それは芸術として、音楽は時の同りに空間を保証しょうとすること、絵画は空間に時を保証しょうとすることによってその生命を持つのに外ならない。

時を最も保証しょうとするタイプの作家の代表として三島由起夫を上ることができる。そして彼において空間＝現実の明せきな知がどのような役割を果しているかみるならばこのことは一層明らかだろう。「熊野」の美意識の中にこれらのことを典型的にみることができる。

この写真集が、以上のような前提により、一つのトータルな把握への試みとしてなされる以上、それは空間の定着＝撮映という作業とその結果の中に時を持ち込もうとする試みでなければならない。それは単に心象の奥に秘む観念を喚起するということではなく、その作業を保証するものとして時を同化することでなければならないのだ。テーマによる集合写真の試みなどは、むしろ空間的保証の作業なのだが、それが時の保証としてどの程度の成功を収めているかは問題である。「人間とは何か」という問いかけをどのような内化できるものとしてこの写真集が持っているだろうか。（立）（焼き込み写真は同書ラングーン付近の子供）（丸善出版部・写真五五四葉・六〇〇円）

近着雑誌

世界 九月号

他の総合雑誌が戦後二十年だとか平和運動などの特集を大々的にやっているのに、「世界」では、日韓問題の論文四本と断然他を抜いて日韓条約については目だっている。

野口雄一郎氏の「日韓経済協力の虚構」は日本独占資本の対韓進出を鋭く指摘し、賠償、経済協力の名を借りた対韓侵略であり、対共産権軍事同盟化の一環であるとしながらも、日韓の友好は東西冷戦を強めてはならず、朝鮮の南北統一、独立を侵害してはならないまた真の賠償でなくてはならないという一般的な視点からの批判に終っているのはもの足りない。国際資本主義、東南アジア情勢から日本独占資本の矛盾をもっと強く言うべきではなかったかと思う。

その他「日韓新時代への日本の賭」（藤島宇内）「調印後の韓日政情」（孫性祖）「法的地位の朝鮮人像」（ルポ）」（中薗英助）などそれぞれ異る視点からの日韓問題が描かれているが、皆を合わせて理解するのが総合雑誌の限界でもあろうか。それにしても日韓問題を鋭く分析した好論文は少ない。

京大生のオアシス

コンパ、ご宴会に、気軽に御利用下さい。〃大将軍〃自慢の味と値段で学生諸君のおいでをお待ちしています。

◇お座敷料、サービス料は一切不要です。

ロース焼肉・冷麺・中華料理

大将軍

天下大将軍

京・四条大宮阪急前 TEL(84)9162
京都駅前タワービル西 TEL(37)8090

540

京都大学新聞

学生団体 京都大学新聞社
京都市左京区吉田
京都大学構内
京都㊧8111（学内142甲）
振替・京都3909
（1部10円）

お知らせ

世界の若者（アメリカの巻）黒板、京大雑誌拝見は都合により休載させていただきます。来週号より再び掲載致しますので御愛読下さい。

河原町での休暇

野村修

市民運動をめぐって特集をするが、おまえさんはそんな運動のひとうにひっかかっているらしいから、何か書きなさい、と京大新聞のほうから言われたが、どうもてれくさい。たしかにぼくは、京都青年行動委員会の行動に加わったことがある―具体的には、ヴェトナム侵略と日韓条約への共犯関係を断絶するよう、人びとに呼びかけるために四条河原町の一隅にすわりこんだことがある―が、ほかのなかまにくらべて怠けもののぼくは、四条河原町でゴドーを待ちながら、といった域をまだ脱していない。箱入りオヤジと箱入りムスコの村よりは、河原はいくらか風通しがいいような気もするけれども、ぼくもまた、箱をひきずって歩いている「身分」なのだから、大きなことは言えない。言えないことを言おうとするから、以下はいきおい、マジメ・スタイルにもなり、ひとりがてんの早口にもなっている。

自発性と意識の革命

六〇年六月にいたる日米安全保障条約反対闘争が、ぼくらのなかに濃くしみついている従属的精神、臣民根性を痛打する「意識の革命」としては進行しなかったことを、人びとが「悟りそこねた仏のような顔つきをして」いた同じ年の八月に、谷川雁は指摘していた。安保斗争は、大衆の自発性（谷川のことばで言えば「内発性と自律性」）をたしかに触発はしたけれども、しかしその闘争は「内発性と自律性をどこまでも拡大しようとする方を処長上」にすえられてはいなかった。むしろ逆に、自発性の展開を圧殺し、反体制組織の内部にも体制を強化する方向を辿って、闘争は終熄したのである。

すでにその以前から、谷川にとっては「多様性と創意性と統一」が「こんにちの組織論的課題」であり、そのためにかれは「いささか形式的ともみえる」工夫をかさねてもいたのだが、六〇年の経験のあとでは、かれのいう組織論的課題は、ひろくぼくらが担うべき課題でもあったろう。しかしこの課題は、担いとられることがなかった。大衆自体の自発的行動によってしか学ばれない大衆の自己権力は、北九州の小さな一角に、いまもなお隔絶されたまま孤立しているように見える。

個人的な休暇から

戦闘性の回復へ

その一方で、六〇年以降、秩序の再整備はほとんど渋滞することなしに進捗した。大衆はふたたび日常のなかに、勤務と私生活のなかに帰っていった。安保闘争の記録を書いた日高六郎は、戦後日本の政治過程を「私的個人および小集団のエゴイスティックな雑居状況」プラス「政治物理学的なメカニズムの体系化」、と概括していた。が、安保闘争後にも同じ過程が再生したと言えるかもしれない。ただ日高は、個人の「私生活への没入」は、戦後日本にあっては、国家への個人の抵抗（戦中への回顧をつうずる国家への恨みと、敗戦直後における国家の信用失墜とからくる、受動的な反抗）だった、と見なしているが、この点はどうだろうか。たしかにそういう契機はある―そして安保後には、国家に加えて反体制大組織の信用失墜があった―としても、しかしそれ以上に、私生活への没入なるものは、抵抗の所産ならぬ支配体制そのものの所産だろう。日高自身も、私的個人の雑居と支配秩序の整備との同時的進行を、確認していたではないか。

「私生活」脱却の道

ゆきあたりばったりのやりかたになるが、手近な本から、裏づけになりそうな立論を、ひとつふたつ拾ってみる。ひとつは多年の支配によって祭が休暇に解消された、とするロジエ・カイヨワの論だ。カイヨワによれば、古くは祭とは動乱期そのものだったが、しかしその破壊的・現状打開的・あえていえば革命的な要素は、数千年の支配によって、しだいにただ茶番に、イト高キトコロから操作されるおまつり騒ぎに、変質させられていった。「社会という有機性が複雑の度を加えるにつれ、生活の惰性的進行の停止は、許しがたいこととされる。今日は昨日のように、明日は今日のように流れねばならない。全般をおう氾濫の可能性は、もはや断ち切られた。動乱期は個人化している。休暇が祭を解消したのだ」

もうひとつ―これは、いわゆる大衆社会論者には自明のことかもしれない―は、近代社会は交通・通信の手段の発達によって、個人と個人・家庭と家庭をかえって隔離し、隔離することによってかえって類型化し均一化した、とする説である。ホルクハイマーとアドルノは、かかる分断と均一化との進行の見やすい一例を、電話から放送への「進歩」のなかに見いだしている。電話は、電線につながる両者を、まだしも主体として登場させるが、放送は「民主的」に、人びとを「平等」な聴取者にしてしまう。反論の装置は、いわば逆放送装置は、まるで発達させられないし、聴取者には放送の自由はない。人びとの自発性は、タレント登竜門といったたぐいの番組によって、まがいものにされ、操られ、吸いとられてしまう。「タレントたちは、企業によって提供される以前から、とっくに企業に所属している。でなかったら、あんなにいそいそと服従するわけもない」

ところで、企業所属のタレントとしての生活（勤務）が日常であり、そのあいまに、かっての祭のおもかげをとどめぬ休暇がはさまるだけだとすれば、これは支配の（企業の）予定するルーティンにすぎない。このルーティンのなかでは、大衆の自発性は、個人の私的な領域へ後退し、そこに封じこまれる。そのとき私生活とはなんだろうか。たとえ人がそこに自発的に没入しようとも、それは抵抗であるよりもむしろ「ほんらいのブルジョア的生存形式」（ホルクハイマー／アドルノ）であって、支配の構造を補完するものでしかない。

従属的精神への痛打

「タレント」から脱却

ぼくらは、大衆の自発性と創意性を私的な領域からひっぱりだし、民衆の広場を創造（あるいは再創造）しなくてはならぬ。支配体制がその犯罪性をむきだしにしているいま、闘争の激化は必然だが、そのばあいにもぼくらは、ぼくらの闘争を、同時に谷川の言う意味での「意識の革命」として推進することができねばならない。さもなければ、六五年の闘争もまた、六〇年のそれのヨリみじめなくりかえした―いわば休暇に―終ってしまうだろう。

こんにち「市民運動」と総称されている反戦、反権力の諸運動は、いいだ・ももが指摘するように、平和運動大組織の内的空洞化に面した「市民個人の自発主体性において下からの発散的なセルフ・スターティング」としてきたものであり、そ多かれ少かれ、右にちか識がふくまれている、とぼくう（もっとも（べ平連）の「平和讃歌」などを聞かされると、ひでえ部分もあるもんだな、という気がするが）。京都青年行動委員会の運動へのぼくの関心も、この運動を構成する労働者、学生、市民の個々のなかに、右の問題意識が生きている、と思えるところから来ている。その意味でぼくの関心は、ローザ・ルクセンブルクやベルト・ブレヒトや谷川雁の仕事への関心の、延長線上にある。

委員会そのものについては、京大新聞ではすでに五月に紹介された（ぼくがこの運動を知ったのも、その記事によってだった）し、委員会自体が最近「闘いの歩み」と題する中間報告をリーフレットで出してもいるから、説明はしない。ぼくなりに概括をこころみれば、この委員会の運動は、生産点との密接な連繋を欠いている現在では、表現の自由の街頭での行使と、内部の自由討論とにまだ限られているけれども、しかし可能なかぎり、従属的精神を痛打する大衆の自発性の発現をはかることによって、現局面での労働運動の新たな展開に役だつことを、一貫して志向している。むろん、このような自発的運動と、いわゆる大組織の運動との「重合」の問題は、いいだも認めているように未解決であり、その点の解決の困難さについては、委員会も気らくな幻想をいだいてはいないのだが。

（教養部助教授）

佐々木先生と新聞

入山雄一

なくなられた佐々木惣一先生について、なにか書くようにと編集局からの申しつけである。おりあしく暑中休暇中で、この新聞の発行は少々ズレるし、世間大方の新聞は、すでに詳しく書いてくれた。いまさら私がそれに蛇足を加えるのもどうかと思うので、この新聞との関係の一端を、下命の枚数だけ書くことにする。

この新聞の前身京都帝国大学新聞は大正十四年四月の創刊であり当時法学部長だった佐々木先生が部長になって下さった。

いまのような言論自由の時代とはちがって、新聞紙法や出版法というような取締法規があり、一つ間違えば罰金はおろか、体刑まで課せられることになるので、発行兼編集人を学生にしておくと、もし事件がおこった場合、父兄から預った大切な学生を、傷つけることになってはならぬ。そのため私のような多少新聞に経験のあるものを、その名儀人にして責任を負わせることになっていた。

法規のうえではそうであるが、いっさいの指導・監督は部長にまかされている。東京大学新聞の部長は美濃部達吉先生、東西両帝大の新聞部長は、期せずしてわが国憲法学の両大家をいただく幸運にめぐまれた。

はじめ一年は、いくらか活字に縁のある学友会誌の編集委員が記者の仕事に当った。しかし次年からは、先生のご意見で全学学生から公募した。

月二回発行から翌年は旬刊と、新聞は次第に成長して行った。そのころ左翼学生の団体に、社会科学研究会があり、その会員は新聞部か講演部にはいるので、学友会傘下のサークルでは一番厄介な部であった。講演部長は赤川先生（いま立命大総長）や滝川先生（もと帝大総長）らが面倒をみておられた。東京大学でも同じように、新人会の学生が新聞を牛耳っていた。

とにかく私が法律上の責任者なんだから、すべての原稿はみな一応私の手もとに集る。これはどうかなと思われる原稿があれば筆者と話し合って取捨をきめる。私も三十そこそこの若いころであり一緒に飲んだり遊んだりして、よく意思が通じ合っていたので、どうにかスムーズに事がはこばれていった。しかし、どうしても筆者と意見のあわぬときは、先生を研究室に訪ね、双方の意見をのべて先生の裁断を仰ぐことにしていた。だから左翼の闘士をうちにかかえながら割合おだやかに発行ができた。

創刊以来五年の永きにわたり、毎週編集会議に出席して、指導された先生が、一身上の都合で部長を辞退された。あとを引きうける人がなく学生主事が臨時部長代理となるに及んで事が面倒になった。学生主事というのは、当時思想善導のため大学におかれた人々であり、左翼学生の善導が任務だから、ちょっと厄介なことになった。これを世間では京大新聞事件という。

〇

告別式の日私は法学部卒業の早瀬譲氏に逢った。その時〃僕は三年間佐々木先生の年賀状を書いた〃というので、私も思い出したのであるが、千にあまる端書を先生一人で書ききれるものではない。私は平素のご恩返えしのつもりで何年も学生をつれて、そのお手伝をした。表ての宛名は、私どもが書くのであるが、裏には必らず先生みずから毛筆で署名された。そして〃字はまずくても仕方ないが、書き放しにせず、丁寧にかくように〃と、一言だけ注意された。早瀬氏は学生に似合わず能筆の人だったので、毎年その選に当ったのであった。

私の知る佐々木先生はそんな人であった。大学の先生は学者であると同時に教育者でなければならぬ。この二つを完全に兼ねそなえた人は先生であったと思いうかべながら、おりからの京都市葬をまえに、つつしんで先生のごめい福をいのる。

（本社顧問）

同学会旧執行部 予算報告作成か

同学会旧主流派は統一派、新執行部の追求や、府学連、フロントの要求に応えて、予算決算、備品問題などの詳細を報告するものとみられている。

TCM
フォークリフト ショベルローダー ストラドルキャリヤ トラクターショベル
東洋運搬機株式会社

TCM
MFD IN JAPAN UNDER LICENSE FROM CLARK EQUIPMENT C.A U.S.A

〈30秒〉整髪！

適量ふりかけて、30秒間マッサージ――ほどよいネバリが出たところで、そのままクシをお当てください。サッパリ、ソフトなヘアスタイルができあがります。独特のメントール効果の爽やかさとダンディーな香り、すべて丹頂ヘヤードレッサーならではの持ち味です。水溶性ですから洗
液体整髪料です。 140cc 300円

丹頂ヘヤードレッサー

丹頂株式会社

〃のお仕上げには丹頂チック